

六 花



2011 平成23年
俳句雑誌りつか

12月号

Cover designed by Little Bird

夜の柿そそのかされずとも盗む
木の葉降る両手上げむとしてをれば
櫛と句誌形見ぞ菊に包まれて
玉砂利を踏まば四方へ秋の声
雑踏の中に顔置く秋の暮
六甲や木の葉時雨に肩濡るる
口紅に筆のへこみや吾亦紅
根の国の石を包める苔に露
冷まじや綿棒ほどに指の骨
夜よりも寂しき木の葉降る昼は

日の透けて虫喰の梅紅葉せず
白極む山茶花に雨近づかば
散りながら咲きつぎぬたる姫椿
澄む水に良縁ありと占ひは
通草の実下を向くなと笑ひけり
数珠玉を指を傷つけてしごきけり

十月二十七日(明石高校西側隣接墓地・鳥川家)

虫残る四十九日の骨納め

ふと心配して

末枯の茅萱ちがやに風の来て遊ぶ

追悼特集

こどりの自画像的作品

(既発表未発表含む作成年度不明。ひと区切り千句の中から)

六甲分類抄出

靴脱いで投げたくなりし菊日和

どこでもいい横になりたし十二月

ちよつとだけ私かくして秋桜

ねこじやらしに遊んだ日々夢だつた

泣き言は言はず酒飲む炬燵かな

空き腹に温め酒の脈打てる

靴裏で踏みつけてより栗拾ふ

孤独とは強き言葉よ時鳥

傘閉ぢて野分の中を歩くなり

姉妹では私ひとりよ障子貼り

秋うらら脚をゆつくり組みかへて

秋の声身をくるみくる眠気かな

秋深む何か綺麗な物買はむ

秋燈たれも訪うては来ぬ暮らし

秋風の鎖骨のみぞに溜まり過ぐ

秋冷のひざをベンチに揃へたる

秋簾巻き上げてゐる背中かな

十六夜や泣きたくなれば唄ふ癖

初秋に似合ふと知りしミルクティー

障子貼り終えしものより立てかける

障子貼る紙幅うまく合はぬなり

障子貼る秋をやさしく迎へむと

寝やうとは思はずに寝る夜長かな

生き方を探して辿り着く濃霧

雪しまき我が身は青き燭となる

先々に思ひ巡らす師走かな

素面では帰るものかよ忘年会

草露に靴を濡らして歩みけり

足裏に響く轟音秋出水

置き時計文鎮にして虫の夜

虫の音を振り払はむとする夜かな

天仰ぐのみの淋しさ曼珠沙華

渡されし桃の実握り潰しけり

土瓶蒸しの松茸眺め食べぬなり

桃剥くや流しに汁の落つる音

湯上がりの髪に秋冷いたるかな

南瓜の煮物ばかりを食ふ子なり

賑やかに蟹鍋つつく夜は更ける

物の音が澄むあれこれが甦る

平坦な声の電話や秋の昼

母の手を真似ればよろし障子貼る

訪ふ人のなき病室や稲光

忘年会くだをまけたら楽だろに

枕辺の手鏡を取り月今宵

鳴るものの全て儚し秋初め

木の葉髪浴室に立ちみつめをり

木犀のただよふ風を帰るかな

大橋の影はむらさき鳥渡る

笹村 政子

おおはしのかげはむらさきとりわたる ささむらまこと

猪垣の切れ目抜け来し奥の院

腹浮かせかまきり道を過ぎりをり

蹠の乾いてをりぬ秋彼岸

朝顔の種に湿りのありにけり

影の色への先入観を捨てた。見ていて見えずを打ち破ったところが秀でている。物の形や遠近感、色など私たちは普段教育されたり見聞きした知識の先入観で物を認識し、覚知している。

例えば空を描かしたら、多くの子どもは水色に塗るだろう。また夕方撮った風景写真が赤いことに驚いた経験があるだろう。人間は目で見たとおりの赤い景色を脳で補正しながら色を認識しているのだ。だがカメラは正直に赤味のかかった風景を写し取るのである。掲句もしかし、知識を排除して物を見たことにより出来たのである。色紙に書ける優れた作品。

蜘蛛の囿の真中に蜘蛛の動かざる

永田万年青

くものいのまなかにくものうごかざる　ながたおもと

秋暑し犬を連れ行く日暮待つ

秋草や袖から入る川の風

秋高し近づくバスの煌めいて

秋燈や棚に伊万里の飾りあり

一見平凡だが実に堂々とした風格の作品。

大上段に構えて太刀を振り下ろしたような作品になった。蜘蛛は囿(網)を張って待つ。しかし果報は寝て待つというのではなく、最善を尽くして結果を待つという男ぶりを感じさせる作品。真ん中にでんと腰を下ろしている様が何物にも動じない修行を積んだ高僧のようでさえある。が、蜘蛛は囿に掛かってくる獲物に全神経をとがらせ、耐えて待っているのだ。虚子は「陳腐な作品は採らないが、平凡はよしとする」と言っているがその通りである。堂々たる平凡はよい。

雪 卿 集

12月号

蟻 蠓 や身を躲してもまとひつき
蝉 鳴 けり空向く形を疑はず
門 灯 は守宮の漁場動かざり
終 戦 日 敢えて麦飯炊かせけり
農 耕 系 西 瓜 を 搦 む 指 太 し

松本文一郎

貝森光洋

お に ぎ り に 梅 干 し 一 つ 震 災 忌
コ ロ コ ロ と 芋 虫 の 夢 楽 し げ に
ダ ツ ク ス フ ィ ン ト い よ い よ 胴 長 豊 の 秋
咲 き 満 ち て 渾 身 の 白 蕎 麦 の 花
瓢 箆 の 思 う 存 分 く び れ お り

せつじゆしゆう
雪樹集

秋
蝶

志方
章子

秋暑かな月も上気をしてをりて
一見は打ち身の多き桃なりき
鈴虫の鳴いてをりけり金魚玉
秋蝶の影が歩道を飛び去りぬ
蝉めぐる諍ひに兄泣きにけり

秋の蝶

蟻

蜂

月受けて白く妖しき屋根瓦
月冴えて群れゐる雲もほの白し
翅はね立てて動き忘るる秋の蝶
秋の蝶朝日に透けてをりにけり
電線の鳥秋雨に動かざり

螢雪譚 六甲

蝉鳴けり空向く形を疑はず 松本文一郎

蝉が空を向いて鳴く姿を変だと思う人は余りいない。だが文一郎さんは「果たしてそうなのか」と疑問を持った。何でも疑えばいいというのではないが、この疑問こそは俳人としての好奇心である。その好奇心は独自性を持った作品を生む原動力でもある。掲句はその良い例。おおよそ地球上で生きとし生けるものは引力に従って頭を空（上）に向かつて姿勢を保っている。まれに蝙蝠などのように逆さにぶら下がって生活する物もあるが、それはまったく例外である。そのことを、蝉は何にも疑わず頭を空に向けて樹木に留まり鳴いていると言った。そのことは蝉ばかりを指すのではなく生き物全てについて、否読者にまで疑問を投げかけている。実に哲学的な意味合いを含んだ作品。

「素朴な疑問」はたいせつなのである。ことりも生前はよく素朴な疑問を六甲に投げかけてくるので言葉に窮した経験が一杯ある。次に「終戦日敢えて麦飯炊かせけり」。終戦日は太平洋戦争が終結した日。その日のことを思い出しながら敢えて麦飯を夫人に作って貰ったのだが、敢えてというのは「炊かせけり」にも掛かる言葉。現代なら「炊いて貰った」になるが当時の亭主閑白（今も？）の男性上位の言葉遣いをしている。「農耕系西瓜を掴む指太し」。この作品にも「農耕系・指太し」に魅力がある。四十億を超えた世界の民族を敢えて二分すれば「農耕民族」と「狩猟民族」に分けられる。なるほど狩猟民族の手や指が太くがっしりしているわけではないだろう。

六花集

白桔 白は 桔梗の 秋色の きつぱり 雨音が 誰かの 菊の花 大の雨 あと一 散草の 初秋の 釣人の 三世代
梗は紫の 梗のこは 色のはと づぱりと 音と聞 かの花 雨のの 一つあ 骨の露 や 秋の軒 人道の 代揃
夜を紫は 飛は白く 思ふ桔梗の 花であり 神とく 月居の 祭と せしで 軒を重 道のを 揃へ
び立つやも し梗か けり 花で ありに 音や 無そ ばな 山台 墳を ねる 拓き 火焚 門火
ずなりなり けり 思ふ 桔梗 花で ありに 音や 無そ ばな 山台 墳を ねる 拓き 火焚 門火
けり 思ふ 桔梗 花で ありに 音や 無そ ばな 山台 墳を ねる 拓き 火焚 門火

藤生不二男

加納淳子

平居濤子